



肺炎と肺炎球菌ワクチン

はじめに

日本人の死因の第1位は癌、第2位は虚血性心疾患です。そして現在第3位は、脳卒中を抜いて肺炎となっています。しかも、肺炎で亡くなる方の約95%が65歳以上の高齢者なので、高齢者にとって肺炎は重大な疾患です。今回は肺炎とその予防ワクチンである肺炎球菌ワクチンについて解説します。

+ 肺炎

風邪はウイルスの感染によって、鼻腔や咽頭、喉頭などの上気道に炎症を起こした状態をいいます。

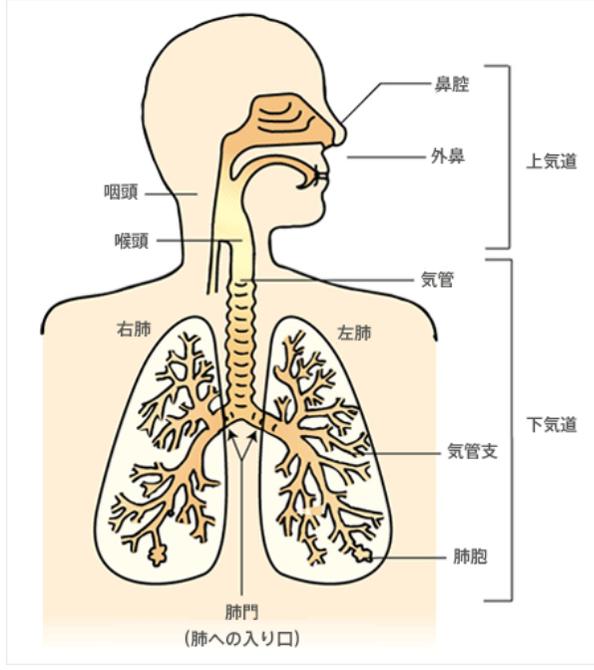
症状としては、皆さんご存知のように喉の痛みや鼻水、咳や痰が出ます。

風邪であれば通常は1週間以内におさまりますが、炎症が長引き、下気道である気管や気管支に炎症が及ぶ場合は、細菌による二次感染を考えなければなりません。気管支炎を起こすと咳が強くなり、膿のような痰が出るようになります。

気管支からさらに炎症が広がり、肺の末端組織である肺胞にまで炎症が及んだ状態が肺炎です。

肺炎になると、高熱や激しい咳、胸痛、呼吸困難などの症状が出現します。肺胞にまで炎症が広がってしまうのは、体の免疫力が低下しているからですが、その大きな原因として加齢があります。

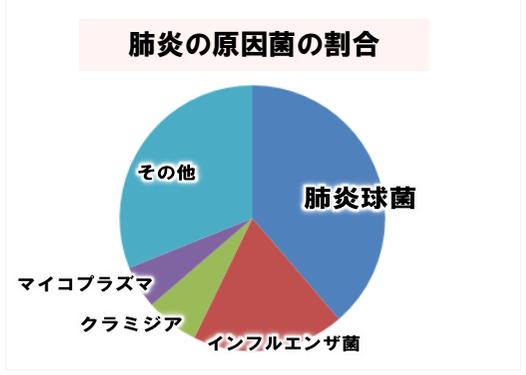
また、高齢者は糖尿病や心疾患、呼吸器疾患などの慢性疾患を持つ方も多く、これも免疫力をさらに低下させる原因となり、なおさら肺炎を発症させやすくなります。



+ 肺炎の原因菌

肺炎を起こす菌として一番頻度が高いのは肺炎球菌で、これが3分の1を占めます。

次いでインフルエンザ菌、クラミジア、マイコプラズマと続きます。

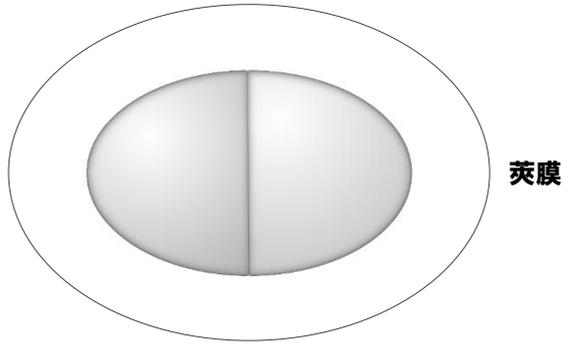
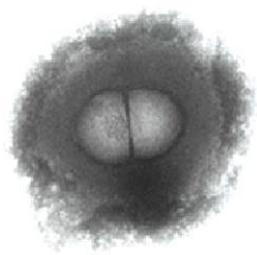


+ 肺炎球菌ワクチン

一番多い原因菌が肺炎球菌なので、これに対する抗体をあらかじめワクチンによって体に作っておけば、肺炎による死亡率を劇的に低下させることができます。

肺炎球菌は図のように双子の球菌で、莢膜と呼ばれる膜で覆われています。この莢膜の違いで肺炎球菌は90種類に分類されます。肺炎球菌は莢膜を無くすと死滅してしまうので、ワクチンでこの莢膜を攻撃する抗体を作らせるのです。

現在、肺炎球菌定期予防接種に使われているニューモバックス®は、肺炎をよく起こす23種類に対応しています。一度接種すると効果は5年間持続します。



肺炎球菌

冬期になるとインフルエンザが流行します。

このインフルエンザ感染に引き続いて肺炎球菌による肺炎を発症しやすくなるので、高齢の方は、インフルエンザワクチン接種とともに肺炎球菌ワクチンを接種しましょう。岐阜市では来年3月まで、65歳以上の方は初回接種に限り4000円でニューモバックス®が接種できます。